

社会的意味の計量分析：1875～1979年における 極度の〈食べなさすぎ〉を取り巻く社会諸制度の解明

首都大学東京大学院 河野静香

1 目的

本研究の目的は、医療化とよばれる歴史的变化を参照基準として、近現代日本における摂食障害の生成過程を明らかにすることである。英語圏では20世紀以降、従来 self-starvation として認識されていた事例が摂食障害として医療的介入を受けるようになった (J. Hepworth 1999)。だが Hepworth は摂食障害の生成過程を医療制度の発展として捉えるため、他の社会諸制度との連関を看過している。本研究は、摂食障害の生成過程を極度の〈食べなさすぎ〉が多様な社会制度の介入を受けるようになる過程として捉え返した。

2 方法

研究方法として新聞記事を対象に、テキストマイニング（以下 TM と略記）と質的内容分析を行った。分析に使用したのは発行部数の上位3位内を占める『読売新聞』、『朝日新聞』、『毎日新聞』であった。食べなさすぎという行動を表す7つの語——断食、減食、節食、摂食、拒食、絶食、ダイエットを選定し、これらが見出しあるいは本文に含まれる記事を検索したところ、1875～2018年の間で36,958件あった。本研究はキーワード検索で一次的な資料選択を行った後、KH Coder で新聞記事の見出しの TM を行った。TM を採用したことで質的内容分析だけではみえてこない、膨大な資料の全体性が把握することが可能になった。TM をもとに3つの時期区分——「医療化以前の時期」（1875～1979年）、「医療化の時期」（1980～1999年）、「治療と支援の時期」（2000～2018年）を設定し、各時期における新聞記事の質的内容分析を行った。

3 結果

新聞記事の質的内容分析から、3つの時期区分において共通する記述が析出できた。それは本人が意図的な摂食拒否を繰り返したことで習慣化した身体に関する記述であった。本研究では極度の〈食べなさすぎ〉を本人の意図に関係なく習慣化した身体のはたらきとして分析し、極度の〈食べなさすぎ〉に関わる社会諸制度を明らかにした。宗教的目的による断食や政治的目的によるハンストが頻繁に取り上げられていた「医療化以前の時期」では、人びとの存命の危機に関わる極度の〈食べなさすぎ〉に対してのみ社会諸制度は介入を行っていた。「医療化以前の時期」の社会制度は内科的治療を行う医療が中心であり、極度の〈食べなさすぎ〉が精神疾患として取り上げられることは稀であった。ただし、政治的目的によるハンストの場合は警察による介入も積極的に行われていた。

4 結論

以上の結果から、19世紀後半～20世紀前半までの日本では極度の〈食べなさすぎ〉に対する社会的対処への関心はきわめて希薄であったと理解できる。内科的治療を行う医療と警察が中心的な役割を担っていたことから、この時期は人びとの生命の維持がとりわけ重視されていたと考えられる。ここから摂食障害の生成過程では、身体の維持が重視される時期から、問題のない「正常な身体」への修正が求められる時期への移行があったという仮説が得られた。

文献

J. Hepworth, 1999, The Social Construction of Anorexia Nervosa, London: SASE.